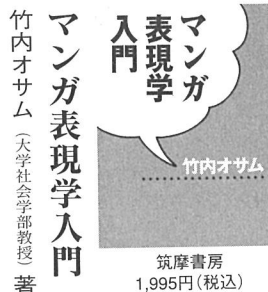


著者は、マンガ研究者であると同時に、自らもマンガを創作してきた経験を持つ。本書は、その著者が、自らのマンガ創作の経験を踏まえつつ、氏の個人誌「ピランジ」を中心にして、長年にわたりマンガの表現について発表してきたものをまとめたものである。

巻末に掲載された文献リストにもみられるように、マンガの表現について書かれたものは少なくない。それは、例えば擬態語表現からのものであったり、マンガ特有のコマ割りに関するもの、さらにはメディアとしてのマンガを論じたものなど、そ



筑摩書房 1,995円(税込)

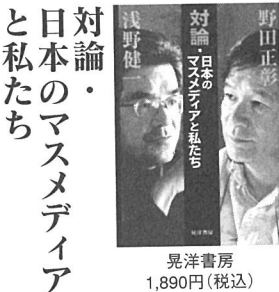
のアプローチの方法は実に多様である。そんな中で、私が、著者のマンガ研究においてもっとも印象に残っているのは、1978年に発表された「手塚治虫マンガにおける映画的手法」について論じたものであった。著者のその真摯な姿勢でマンガ研究に励む姿が、当時も今も変わらずあることは、本書からもかいま見ることが出来る。

戦前から戦後、そして今日に至るまで、マンガは量的にも内容的にもすさまじい発展を遂げ、マンガが有害であるなどという議論もどこかへ消えてしまった。今では当たり前のようになら、そのマンガについては、歴史的な目配りもしながら、多様な視点からマンガについて考えさせてくれる本書は、改めて多くの示唆を与えてくれる好著であると言えるだろう。

川勝泰介(京都女子大学教授)

メディアは常にフレーム(枠)によって事実を切り取る。フレームの内側だけを見ていると、その外側に何かがあるかは分からない。このメディアも同じ切り方をしている、その内側でどう報道するかどうかを競い合っているとき、いつの間にか、その外側のことは考えなくてもよいのかのように思い始める。

本書で論じられていることを例にあげよう。たとえばJR福知山線脱線事故で、各新聞社は犠牲者の顔写真を何枚集めるかを競い、被害者のプロフィールを求めて記者が同志社大学のキャンパス内まで徘徊した。しか



晃洋書房 1,890円(税込)

し、冷静に考えて、本当にそんなに詳しい被害者情報が必要とされていたのだろうか。そんなフレームの内側で競っている余裕があったら、この事故が、なぜ、どのように起こったのかを、ただ技術的な問題としてではなく、国鉄分割民営化以来の構造的な問題として徹底解剖し、悲劇を繰り返さないための事実を提示することこそ、重要な課題ではなかったか。

このように本書は、現代日本のマスメディアにおけるフレームがどのようにできあがっているか、その外側には何かがあるかを、対談形式で分かりやすく提示している。二人の対話は多岐にわたるが、特に司法、医療、犯罪報道の関係を論じた部分は、メディア学者・浅野健一と精神医学者・野田正彰ならではの含意がある。

フレームの内側に浸っている人には「オヤ？」と思う部分もあるだろうが、その違和感からこそ思考と議論と行動が始まるのである。

坂垣竜太(大学社会学部専任講師)



思文閣出版 1,995円(税込)

新島襄を語る(一) 千里の志

本井康博(大学社会学部教授) 著

本書のように、大変読みやすい文章で新島襄について知ることのできる今の同志社の学生諸君は幸せである。

私の学生時代、「新島精神」というテクニカルチームはよく耳にしたが、その具体的な中身について知りたかったし、たまたま見つけたとしても正直言つて小難しかった。要するに、「二イジマジヨウ」は「難攻不落の城」だった。

それに比べて、本書は何と面白く新島襄を知ることができることか。「猿でもわかる○○○」といった類いの本は往々にして

猿にしか理解できないものだが、本書で著者が「寝ててもわかる」と宣言しておられることに誇張はない。適度な長さの話し言葉の文章はすらすら読めるし、読めば、新島襄に関連したさまざまなエピソードを幅広く知るだけでなく、その教育観、宗教観についても苦勞することなく理解できるのである。

しかも、単なる入門書ではなく、新島通を自任する人にも十分に楽しめるレベルとなっている。また、7つの「新島襄のこ」とば「コーナー」は、新島襄の自筆原稿(遺墨)の写真がつけられてるので、視覚的にも新島襄の文章、言葉の意味内容を理解することができる。

通説後に改めて口絵のボスターの写真をながめてその解説を読むと、同志社に連なつた自分を幸せだとしみじみ感じることもできる本である。そして、読み終えた途端に続編が待ち遠しくなる本でもある。

百合野 正博(大学社会学部教授)



東洋経済新報社 2,730円(税込)

ホワイトカラーの仕事と成果

石田光男(大学社会学部教授) 編著

ホワイトカラーの働く姿を描くのは難しい。あえて、それを描こうと、本学社会学部の石田光男氏と東京大学の中村圭介氏が中心となって研究会を立ち上げた。その5年にわたる共同研究の成果が本書である。デパート2社、自動車メーカー、電機メーカー、情報通信企業、合わせて5つの企業の事例調査を行っている。ホワイトカラーがそれぞれの職場でどのように仕事をしているかが詳細に描かれている。まだ働いた経験のない学生にとっては、文句なく面白い。ただ、それぞれの職場で働いているホワイトカラーが読めば、

当たり前のことが書いてあるに過ぎないと思うかもしれない。しかし、当たり前のことを文章で表現するには理論を必要とする。また、理論がなければ、ただただ事実を語るだけで、私たちの事実に対する理解が深まるわけではない。本書を通して、私たちはホワイトカラーの生産性についての理解を深めることができる。成果主義など、ホワイトカラーの生産性を高めるための人事制度改革が多くの企業で行われている。しかし、著者は、ホワイトカラーの生産性向上の要は、普通の人事管理論では語られることのない、それぞれの職場で従業員の日々の仕事をうまく管理できているかどうか、仕事管理にあるとして議論を展開している。本書は、ホワイトカラーの仕事への理解を深めることのできる一冊である。ぜひ多くのホワイトカラーに読んでいただきたい。

富田安信(大学社会学部教授)

ウォッチング労働法



丸善
3,045円(税込)

ウォッチング労働法

土田道夫 (大学法学部教授)

豊川義明 (関西学院大学教授)

和田 肇 (名古屋大学教授) 著

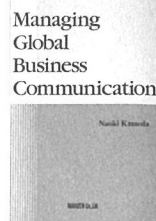
サラーイマン (総務庁統計局の調査では「雇用者」に分類されるが、以下では労働者という) が全就業者の8割を占める雇用社会である日本において、近年、社会経済のグローバル化や少子高齢化等の影響を受け、企業における組織再編や人事制度の改革が加速化している。またそれに伴って労働者・使用者間(労使間)の紛争が増加し、特に退職後の守秘義務・競業禁止義務をめぐる紛争や内部告発のような新タイプの紛争が生じていることは周知の通りである。

本書では、こうした労使間紛争の解決法として労働法を位置

づける一方、労働法の理念を「労働者・使用者および雇用社会における最適な利益調整」を行うことに求め、雇用社会の長期的・持続的発展を展望する法として、労使自治を尊重する仕組みや、労働契約の適正な運営と企業の社会的責任(CSR)経営のインセンティブを提供することも労働法の任務であると指摘している。

本書は、2001年から2004年にかけて「法学教室」に連載された「ウォッチング労働法—変化と展望—」を基にして編まれた事例問題形式の演習書である。先端的なテーマを含む労働法の全分野を網羅する36個のテーマについて、具体的な事例問題が設定され、事例・現実例・裁判例のほか学説も可能な限り言及されており、雇用社会の法的ルールを体系的に学ぶことができるものとなっている。労働法に関心のある皆さんに、是非一読をお薦めしたい。

上田達子 (大学法学部助教授)



丸善
2,730円(税込)

Managing Global Business Communication

丸善 著

本書は「現在または将来の国際ビジネス・ビブル」が、グローバル・ビジネスにおいて、効果的にコミュニケーションを行う手助けをする」ために書かれた英文による労作である。

主張点は、①言語能力とコミュニケーション能力は異なる、②言語能力だけではコミュニケーションを円滑に遂行できない、③アジア人と西洋人のコミュニケーション・スタイルは異なる、④異文化コミュニケーションの概念として「相手中心思考」を提唱することだ。

現在はグローバル時代。ところが、日本人のコミュニケーション

ョンは独特だ。「説明が先で結論が後になる論理展開」や「結論を述べず察してもらいう言語表現」などは外国人とのコミュニケーションを阻害することが多い。では、どうすればコミュニケーションできるのか?

著者は「相手中心思考」を持つことが大切だと説く。その上で「相手がその言葉を判断できる十分な情報を与えること」と「自分なりの判断あるいは意見を加えること」という方法を提案する。この考え方に従えば、「同志社大学」を Doshisha Universityと英訳するだけでは不十分だ。a [the] prestigious private university in Kyoto (京都の有名な私立大学)と情報を追加しよう。

本書は、読みやすく、品位のある英語で書かれている。国際ビジネスに興味のある人はもちろん、英語(教育)に興味のある人にも有益な本である。

中邑光男 (関西大学商学部教授)



丸善
3,360円(税込)

現代会計の認識拡大

加藤盛弘 (大学商学部教授) 編著

アメリカでは、1960年代のリース会計や年金会計を皮切りに、それまで認識の対象外にあった事実を会計の枠組みに取り込む動きが急速に進展している。またドイツでも、近年、国際会計基準(IAS)やアメリカの会計基準(US-GAAP)に準拠した会計をドイツ国内法に準拠した会計として認めることで、従来は認識の対象外にあった事実を認識する方向に進んでいる。

本書は、会計の認識領域拡大をもたらす新たな会計方法や会計処理基準が、①どのような理論に支えられているのか、②両国の会計制度のなかにどのような組み込まれているのか、③損



丸善
1,470円(税込)

認められたい!

太田 肇 (大学政策学部教授) 著

『認められたい!』というやや衝撃的なタイトルの本書は、一般向けの書でありながら同時に学術的問題提起を含む、注目すべき書である。

従来の心理学の機械論的人間観批判に立脚した人間性心理学者マズロー(欲求階層説)に依拠して、自己実現欲求が現代の最高の動機づけ要因だとする見方が、経営学の教科書やコンサルタントによって広く説かれていた。自己実現欲求にもつばら注目しがちなこの通俗的傾向にたいして本書は、マズローでは自己実現欲求より下位レベルとして位置づけられる自我欲求・承認欲求「認められたい!」に焦点を絞って、その重要性を説

益計算にどのような影響をもたらすのかを整理・検討することを通じて、アメリカにおける現代会計の機能が保守的会計処理(費用・負債の早期計上と利益の縮小)の推進にあるのに対して、ドイツにおけるそれは国際的な資本市場における資金調達容易化にあることを解明している。

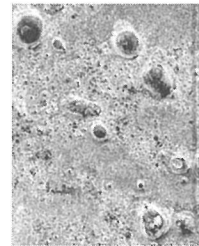
本書の執筆にあたった15人の研究者は、それぞれアメリカ会計・ドイツ会計と専門分野は異なるが、共通のテーマに対してアメリカ的視点・ドイツ的視点から迫っている。本書で取られているこのアプローチは、かつて例を見ない大胆な試みであるといえよう。その意味で、アメリカ会計・ドイツ会計に関心のある読者はもちろんのこと、両国の会計の影響を強く受けているわが国会計に関心のある読者にも、是非一読をお薦めしたい。

政岡孝宏 (天学商学研究科博士後期課程)

き、一つの問題提起をしている。マズローは行動主義心理学に対抗して人間的な内面にある自由・愛・創造性等を重視して階層図式を立てたが、シェーマテイツシュ過ぎて、必ずしも厳密な証明を経ている訳ではない。生理的欲求・安全欲求・社会的欲求・承認欲求等の欠乏動機と自己実現欲求という成長動機とに階層的に綺麗に整理できるものだろうか(実証に耐えうるのか)。それに、何が自己実現なのか、当の本人ですらよく分からないのではないだろうか。自明の真理のように扱うのは、思考停止でしかないのではないのか。この様に議論の余地が多分に残っている分野である。

本書はここに切り込んで、承認欲求(「認められたい!」)を単なる欠乏動機としてとらえる以上の積極的意義を持つものとして理解し、承認欲求の重要性和実践的有效性を説得的に述べたものと評価できるだろう。

片岡信之 (桃山学院大学 経営学研究科長)

河出書房新社
1,600円(税込)

ケミカル・メタモルフフォーシス

遠藤 徹 (大学言語文化教育
研究センター助教授) 著

遠藤徹氏は「姉飼」で第10回日本ホラー小説大賞を受賞したプロの作家であり、最近も短編集の『弁頭屋』を上梓したばかりである。いま最も注目されているホラー作家の顔を持つ遠藤氏であるが、氏にはこのほかにイギリスのロマン派文学、とりわけブレイクの研究者としての顔と、可塑性物質に着目した大衆文化論の研究者の顔がある。この方面での実績はすでに『プラスチックの文化史』、『ポスト・ヒューマン・ボディーズ』、

『溶解論—不定形のエロス』など枚挙に暇がないが、今回の研究書は従来の研究領域をさらに押し広げ、化学物質がいかに私たちの世界で「常態化」しているかを、さまざまなポビュラー・カルチャーを例に挙げながら厳密な科学的考察を加えている。

プラスチック製の椅子であれ、カップ麺の容器であれ、私たちが「人工」だと思っている物質はもともと石油という発掘燃料から生成されたものであるが、自然界に存在する物質の組成を書き換えることによって、私たちは文字通り人工の物質界を作り出し、そしてそこに溺れつつある。インスタント食品などが典型であるが、私たちの身体や意識はすでに「人間」の世界にはない。科学知識に裏づけされた氏が描き出す現在と近未来のストーリーは、まさに「ホラー」である。

田口哲也 (大学文化情報学部教授)

編集工房ノア
2,100円(税込)

戦後京都の詩人たち

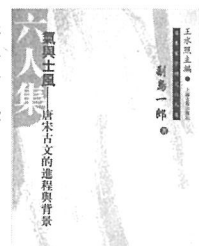
河野仁昭 (元社史資料室長) 著

河野さん(親しくしていただいているので、こう呼ばせていただく事に)が素晴らしい歴史を書いてくださった。京都に繋がりを持つ作家や詩人は結構沢山おられるのだが、京都に居ついている作家や詩人は多くはない。詩人の集団も少ないもので、したがって、面白い波風の立つことも少ない。だから詩人たちの動きも決して複雑なものとは言えないだろう。それでも、京都にはそれなりの詩人たちの歴史がある。河野さんは、ご自身もその中に浸りながら詩人たちの動きを見詰めてこられた。勿論、この書物の中に入っていない詩人たちも居るのだ

が、ここには京都を代表する詩人たちが要領よく纏められていたことは確かだ。京都には詩壇と言えるようなものは存在しなかったが、こうして眺めてみると、なんとなく京都詩派とも言えるものが浮かび上がってくるように思える。この書物に捕らえられている「コルボオ詩話会」から「骨」の「つぼとちび」「ラビーン」と続く流れには、一本の筋道があるようだ。そしてその流れの大きな特徴は、良かれ悪しかれ、文化人的雰囲気であったと言えるかもしれない。

奇を衒わず、智に淫せず、極端を避け、居丈高になることなく歌い続ける詩人たちがそこにいる。これが京都の詩人たちなのだと言わせてくれる書物であり、その詩人たちとともに詩作してきた河野さんならばこそ書けた筋の通った京都詩派の歴史書と言えるだろう。

薬師川虹一 (大学名誉教授)

上海古籍出版社
25元

氣與士風—唐宋古文の進程與背景

副島 一郎 (大学言語文化教育
研究センター助教授) 著

「士」は、日本語の用法とは少し意味が異なり、古代中国社会においては深い学識と広汎な教養とを兼ね備えた「知識人」を指す。つまり本書は、中国の伝統的知識人たちに共有される「気風」、言い換えれば「人的センス」について考察した論著である。著者副島さんのお人柄そのままに、その内容は実にクールで卓越した好著である。

本書には、主に中国中世の散文およびその文体論の研究が展開されている。この所謂「古文」と呼ばれる文章は、前時代に既に確立された中国独特の美麗な

音楽的時間の変容

現代思潮新社
2,730円(税込)

椎名亮輔

音楽的時間の変容

椎名亮輔 (女子大学文学部助教授) 著

音楽にとって「時間」は根源的な意味をなっており、これまで数多くの哲学者や音楽学者、作曲家が、「音楽的時間とは何か?」という命題に取り組んできた。本書では、アンリ・ベルグソンの「純粹持続」や、ジゼール・ブルレの「音楽的時間」、カール・ダールハウスの「音楽現象学」、ジル・ドゥルーズの「差異の概念」といった主要な論考が入念に吟味され、著者はそれらのあいだを自在に行き来しながら、西洋近代音楽にのつての時間という問題に鋭く迫っている。

本書には、大きな特色が二つある。その一つが、音楽的時間論を展開する道すじにむけて、

修辞技法の基礎の上に、その旧弊を自ら打ち破り、いよいよ「真に社会に有益な発言」を求めようとした文体と言え。従ってこの研究を志す者は、単なる文学研究の枠に留まっていけない。作者の血肉たる古代儒学の伝統を十分に咀嚼するとともに、更に現実社会に存在する微細で具体的な問題にまでも立ち入る必要がある。本書が、表題では文学研究を標榜しながら、その各章において「易(哲学)」や「歴史学」、そして「貨幣(経済史)」にまで説き及ぶのはそのためである。かかるグローバルな視角からの分析に成功した副島さんの研究は、中国の学界にいち早く認められ、かくして邦語ではなく、漢語での編集出版となった。訳語も優れて精度が高いが、本書所収の副島さんの著作は、一篇を除いて日本語でも公開されているので(本書243頁に一覧)、是非それらを併せて読まれたい。

静永 健 (九州大学助教授)

西田幾多郎、九鬼周造、廣松渉、木村敏といった日本の哲学者や思想家たちによる思索を照射している点である。それによって、論述の幅と興行きが格段にふくらみ、本書はユニークな比較文化論としても成立している。もう一つの特色は、ジョン・ケージをはじめ、20世紀を代表する作曲家たちの音楽活動を取り上げて、「作曲」「作品」「演奏」「聴取」といった概念に綿密な検討を加えている点だ。これにより本書は、西洋古典音楽を対象とした従来の時間論をこえ、今日的な脈絡において新鮮な時間論を展開する立場をえたとはいえる。

音楽は「そのダイナミックのうちに理解することが必要」とする主張や、音楽が惹き起こす人と人の、あるいは世界と人のあいだの共振性への着目などは、とりわけ強く共感できるものであり、音楽の秘密に関心をもつ人すべてに、本書を薦めた

山田陽一 (京都市立芸術大学教授)

同志社京田辺祭^{まつり}2005を開催

―地域に開かれたキャンパスをめざして

大学京田辺キャンパスは京阪奈丘陵の北端に位置し、今出川キャンパスを都市型とすれば郊外型キャンパスと言えます。文科系の1・2年次生が主に通い、工学部や文化情報学部施設の並ぶ理系要素の強い点、また、広大なスポーツ施設が展開するキャンパスといった特徴があります。今出川キャンパスの歴史あるEVEとは一味違った、これらの特徴を生かした催しを企画しました。

2005年1月の京田辺市との連携協力に関する包括協定の締結や現代GP(けいはんな知的特区活性化デザイン)の提案、特色GP(大学コミュニティの創造)の採択なども開催の後押しとなりました。

11月4日午後6時過ぎから京田辺市長のご出席をいただき、ラーネット記念図書館前広場で前夜祭を開催。笙・

筆^{ひらり}演奏等のオープニングイベントに続き、八田大学長挨拶の後、同志社徹



章と京田辺市市章を象った花火を打ち上げ、好天にも恵まれ幸の良い祭りのスタートとなりました。

5日、6日は体育会の協力によるスポーツフェスティバル、大森一樹氏(映画監督)の文化情報学部開設記念講演会、工学部研究室公開、言語文化教育研究センター外国人教員による民族料理教室、有栖川有栖氏(作家)のトークライブ、図書館閲覧開放、映画上映、京田辺市主催の和楽器演奏会、地域住民出店のフリーマーケット、車椅子体験等の障がい支援体験、(財)日本自動車協会の協力によるエコカー試乗会、モンゴル国雪害救援に賛同いただいた出演者のLIVE演奏等々、多彩なプログラムを実施しました。

京田辺市による無料シャトルバスが運行され、特に好天に恵まれた5日は近隣の小学生や子供連れも多く見られました。参加者は、3日間で延べ約4000人を数えました。

(大学京田辺校地総務課)

現代観光・にぎわい文化論

白桃書房
1,995円(税込)

現代観光・にぎわい文化論
山上 徹(女子大学現代社会学部教授 著)

現在、多くの都市が重要な政策課題として観光開発に取り組み始めている。本書は現代の都市における観光・にぎわいは、どのように創り出されるべきかを論じたもので、まさに時宜に合った良書である。筆者が都市に着目するのは、21世紀は都市を単位とする時代へと変貌するのであり、各都市が観光・にぎわい力を高めれば、個別都市の発展にとどまらず、全体として観光立国も実現可能となるとの見解に基づいているからだ。筆者によれば、都市が非日常的な「モノ・コト・ヒト」の出会い・触合いによって五感に訴

え、いかに適切な感動を与えるかが重要であり、そのための観光・にぎわい力は、力(観光資源)、技(マーケティング)、心(ホスピタリティ)、α(都市ブランド)で構成されるという。各都市はそれぞれの得意技・持ち味を再発見し、ドメイン毎に個別的な観光戦略を立てることが求められる。こうした概念的な枠組みを設定した上で、京都・京都、京阪神の観光連携、港都・みなとみらい21、首都・臨海副都心の観光・にぎわい文化について、それらの都市の特性や歴史的条件を踏まえたユニークな議論を展開している。

今、もつとも肝心なことは、都市の観光・にぎわい創りに「力」以外の諸要素、とりわけ「心」へのシフトが有効であるという。ヒト対ヒトの出会いが大切であり、都市におけるホスピタリティ精神の醸成が鍵を握るという指摘は傾聴に値しよう。

堀野正人(奈良県立大学地域創造学部教授)



晃洋書房
2,100円(税込)

ハイロウズの掟
—青年のかたち—
諸井克英(女子大学現代社会学部教授 著)

研究者の中にもマニアックな音楽好きがいた。著者の諸井克英先生である。

本書は、青年心理に焦点をあてた心理学書である。ジャパニーズパンク・ロックを代表する「ハイロウズ」および「ブルーハーツ」を題材に、移る時代の中で生きる青年像を浮き彫りにしている。青年の自己、友人関係、恋愛、死生観などを各章で取り上げ、ハイロウズの歌詞に流れる音楽哲学「掟」に青年のかたちを重ねていく。「掟」の導き方がいわゆる研究者視点のトップダウン的なものではな

く、青年がハイロウズの楽曲に

抱く自然な形の自己投影感を多分に含んでいる点は、非常に魅力的である。この本ならば、研究者のみならず青年自身が本書の内容に共感し、自らに関する新たな心理学的視点が獲得できるであろう。読みやすく、かつ、思慮深い見解であり、音楽マニアの諸井先生だからこそ執筆しえた斬新な内容となっている。

歌詞以外にも様々な科学データを提示しており、あくまで心理学書ではある。しかし、(鑑賞者の想像を多様に膨らませることがアーティストの素晴らしさであるという前提で)いい意味でハイロウズの歌詞をうまく青年心理に照らし合わせ、点描的考察が総合的な現代青年のかたちを明らかにしている。

「ブルーハーツはハイロウズになつて音楽の幅は広がったけど、メッセーj性のある曲が減った気がする」という若者や、青年の心を日常性のレベルで理解したい心理学者には手に取ってほしい書である。

上出寛子(大阪大学大学院人間科学研究科博士課程)